

「洗腦」療法のききめ



田 沼 肇

(1953.7. 人民文学)

アメリカ人エドワード・ハンターの書いた中国見聞記「洗腦」という譚訳書が、いま売りだされている。中国では、思想改造運動のことを、俗に「洗腦」と呼んでいるらしい。

ところが、さいきん新聞の報ずるところによると、太平洋をこえたアメリカでは、「医学的処置」の一種として「洗腦」療法が登場している。すなわち、アメリカ国防総省は、四月二十八日、朝鮮人民軍の捕虜收容所にいたとき「共產主義宣伝の犠牲」

となつたアメリカ兵を、完全に根治するまでペンシルヴェニアの軍病院に入院させると発表したのである。日本にも、多くのいかがわしい特効薬、たとえば「癌のおおる薬」、「結核のおおる薬」、「若返りの妙薬」等々、どれも現在の医学では確実な治療方法のない病氣についての新薬が、商業新聞などによつて宣伝されているが、さすがに「アカ」を洗いおとすような「医学的処置」だけは見あたらなかつた。そこは文明国アメリカのありがたさなのであろう。

さる二月のアメリカ上院軍事委員会で、一議員から「ちかごろ、金持の息子は徴兵猶予の恩典で大学へゆくのに、貧乏人の息子は徴発され朝鮮にゆかされているという噂をきくが、あなたもきいたか」と質問された国防次官補は、「私もそういう不平をきいた」とか弁じている。たしかに、アメリカでは脱走兵が増えているようだ。AP電報によると、アメリカ第二軍司令部は脱走兵と無断休暇兵を一人のこらず朝鮮前線へ送るといふ強硬な態度でのごむことになり第一陣として脱走兵約百人を嚴重な監視つきでケンタッキーの原隊から連れだしたという。また、アメリカ陸軍の統計によると

海外派遣部隊の將兵のあいだで「ホーム・シック」などのため精神障害を起すものが激増しており、さいきん一年間に、ヨーロッパに二十五十万人のうちから四千人の患者が発見された。

一方、朝鮮人民軍の捕虜收容所で、国連軍の將兵はどんな待遇をうけているであらうか。世間では、「講釈師みてきたようなウソをつき」と言いならわされているとおりこの問題についても、みてきたようなウソをつく人がすくなくない。そこで、ここにはアメリカ側の報道から一つだけ興味ある例をひいておこう。UP電報によると、釈放されたイギリス人捕虜ハートランドは、「捕虜はクリスマスや祭日にはカトリックでも、新教でも、自由におつとめすることができた。收容所当局が賞品をだしてフットボール試合もおこなわれた。捕虜のあいだには床屋がいて、毎日ヒゲをそつた」と語っている。それが、いわゆる「共產主義宣伝の犠牲者」の言葉とでもいうのであるうか。

朝鮮に人民志願軍を送っている中国については、さいきん帰国した人たちの体験談によつて、「みてきたようなウソ」でない、

ほんとうの話しをきくことができる。また、アメリカでも「チャイナ・マンズリー・レヴュー」誌二月号に、新聞記者スタロピンが書いたつぎの記事は、注目に値するといえよう。——「中国の司法部長は中年の美しい婦人である。待女はこの国の公的生活に大きな役割をはたしている多くの非共產黨員の一人であり、民主同盟の一員で、上海でよく知られた弁護士であつた。彼女の名は史良という。彼女は中国では人がでたらめに逮捕されるとか、前国民党員はことごとく投獄されるとか、実業家が誘拐されるとかいろいろのは、まつたく事実を反する。これはみな雑誌タイムのつくり話し以外のなにもでもない」と語つた」

では、いつたいアメリカ国防総省の考案による「洗脳」療法とは、なにを目的としているのだらうか。

ソジエト作家エレンブルグがいうように「アメリカ人は机の上に土足をのせることは、精神の休養になるといつて、好んでやるが、私は個人的にはそれを好まない。しかし、私はアメリカ人が机の上に土足をのせることにたのしみを見いだしているならそれはアメリカの神聖な権利として認めたい。

い。しかしまた、アメリカは他人の机の上に彼の土足をのせてはならないし、アメリカ人でないものが彼らの机を他人の土足から守ることは神聖な権利であると確信している。もし、誠実なアメリカ人なら、みんな私のこの意見に同感だろう。」ところが、このエレンブルグの意見に同感するような誠実さをもつた人こそが、現在のアメリカでは問題なのである。

たとえば、さいきん新聞紙上にぎわした事件としては、アメリカ進歩党機関紙ナショナル・ガーディアン編集長ブルフレージが、上院調査委員会で「きみはいま共產黨員であるか、あるいは過去において共產黨員であつたか」という質問(忠誠調査)に答えるのを拒否しただけの理由で、五月十五日に逮捕され、エリス島へ監禁された。

また、四月下旬、アメリカ作曲家のブラツク・リストが、國務省安全保障長マクレオードに提出された。その結果、國務省令によつて、リストのうち一名を除く他の全部の作曲家の作品を政府が支持することは禁ぜられた。リストには、故ジョージ・ガーシニンやアロン・カプランドのように世界的に有名な作曲家も多数ふくまれて

いる。

さらに、東京新聞の報ずるところによれば、アメリカでは、人種の偏見から日本映画「羅生門」をふくむ一連の作品が部分的な公開禁止を命令されたり、政治的偏見からチャップリンの「ライム・ライト」、ヒューストンの「ムーラン・ルージュ」が上映を拒否されたりしている。とくに「ムーラン・ルージュ」は製作スタッフに忠誠調査を拒否したものがいるという理由で、労働総同盟(AFL)から圧力をかけられている点が注目される。

ニューヨーク・タイムズ社長ザルツバァーガーまでが、今年の正月に、コロンビア大学の同窓会へ出席して、つぎのように演説した。——「アメリカでは共產主義的な書物だとの非難をあびて発禁になる例が多いが、これらの非難は、おそらくその書物を読んでいない連中からだされたものである。討論の場所における種々の討議が制約されている証拠は山ほどあり、自由に討議すれば無責任な非難を受けて、ブラツク・リストにのせられるといつた事例も多い」このような「狂信的アカ狩り」(朝日新聞五月十九日)の先頭にたつている代表的

人物の一人が、マツカーシー上院議員である。「マツカーシーは、アメリカ中西部のムツソリーニであり、自由主義的アメリカ人に、ナイアガラの滝のような中傷のドブ水をはきかけて、共產主義者で裏切者だという汚名をあげせかける大きな口である。かれは、世界の平和を脅かすものであり、これを暴露することは公衆への奉仕である」(ロンドンの新聞、ザ・ビーブル、五月十七日)。

このようにアメリカにおける「洗脳」の目的が、「ナイアガラの滝のようなドブ水」でアメリカ人民の誠実な心を洗い流してしまふことにあるのはあきらかである。そして、その基礎に、アメリカ人民の「脳」の成長をさまたげている「アメリカ式生活様式」がよこたわつている。やや旧聞にぞくするが、朝鮮戦争がはじまつたころの週刊朝日に、「アメリカ留学生の座談会」がのつていた。そこでは「向うの学生が本を買わない」「話しに花が咲き」「トルストイもカントも知らない」「『そういう教養はゼロだね』とアメリカ人学生を批判し」「アメリカ映画は想像よりも水準が低いよ、みる方が低いんだ、大学生でも西部劇が好きだし……」

と語っている。また、さいきん石垣綾子さんが某誌に「ニューヨークの書店」と題してつぎのように書いている。——「買いにきた書物の名前は御存知なく、目方であつらえる。十六ポンドある本をくださいと、まるで肉屋にやつてきたような口ぶりに、店員はたじたじとなるが、そこは慣れたもので、頭をひねつて考えついたのは、ウエブスターの部厚い世界辞典であつた。お客はハカリにかけさせて満足したということだが、おつぎはまるで服地をえらぶように、装釘の色合とサイズで買いくる婦人もある。椅子もじゆうたんも緑だから、緑色で十五インチの書棚にかつちり合うものをということで、表題はかまわず、物差ではかつて洋文のサイズにあつた緑の本を探してあつた。よろこんだお客は、それを十冊あつらえた。まさか同じ書籍を十冊とはおかしいとききかえしたが、相手は室の飾りですからと、大まじめでうなずいた」。

もちろん、アメリカ人民は「ナイアガラの滝のようなドブ水」にも、また「アメリカ式生活様式」の害毒にも抵抗をつづけるであらう。しかし、もはやアメリカの支配グループの頭脳は、いかなる「洗脳」療法

もききめがないほど、第三期的な病状を呈している。フランスのブルジョア新聞でさえ、さいきんのアメリカ外交に關連して、「アイクの平和条件は、あたかも戦勝者が敗戦者におしつける降伏条件を思わせるものがある。このような一方的条件で平和が達成されると考えるのは、空想主義である」ときめつけた。

ワシントンの露地裏では、こんな小話が流行しているそうだ。

「アイクが入院したよ」

「いつたいどうしたんだ」

「それがね、鉄のカーテンをもちあげようとして、腰の筋をちがえたというんだ」

芸術研究一七号

創造的文芸批評の方向

中村俊介

「文芸講話」から学んだもの

佐藤やぶ子

浪曲と大衆演芸 まつしませいいち

宮本百合子の評価 松山 映

千代田区神田神保町二ノ一民科

25円